転生―エクソシスト―祓魔師

荒戸孝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生―エクソシスト―祓魔師

【Ｎコード】
Ｎ３４５８ＢＡ

【作者名】
荒戸孝

【あらすじ】
現世、最強の祓魔師（エクソシスト）として力を振るう隼人の前世は、魔界の王と言われた極悪非道、最恐最悪の悪魔だった。

序章

前世。

ごくまれに、その記憶を持ったまま現世に生まれ出るものがいるらしい。

俺もその中の一人だった。

初めは、それが前世の記憶だなんて思わなかった。毎晩毎晩同じ夢を見るのは、ただ単にストレスが原因だと思っていた。

両親を、目の前で失ったあの衝撃のせいだと――

血塗れた感覚、嘔吐しそうなほどに生臭い匂い、目の前の両親だった“肉塊”。

緋色に染まった手掌がフラッシュバックの誘因となり、俺のなかの前世の記憶が呼び覚まされるようになった。

目の前に広がる煉獄の世、俺は人の姿を為してはいなかった。目の前にある物が人だろうが人外だろうが、ガキだろうが老人だろうが。俺の司る感覚全てに掛かったものを殺し続けた。上がる血飛沫に体を汚し、幾多もの断末魔を切り裂きながら、それでも己から湧き上がり続ける殺しの衝動を抑えることはできなかった。

ただ、俺はそんな己に苦しむような心を持っていなかったらしい。

その夢を見ている時、俺は――

恍惚を覚えるほどの快楽に支配されていた。

第1話：死神少女

一瞬、我を忘れていた吉良隼人(きらはやと)は、ポケットから鳴り響いていた電子音に呼び覚まされた。かなり長くなっていたのだろう。数名が怪訝な顔で、チラチラと隼人の方を見ていた。中には、彼を熱っぽい視線で見つめるＯＬや女子高生も混ざってはいたが。

高校へ行くための電車を待つホームは、朝のラッシュでかなり込み合っていた。まだ時間があるかと、並んでいた列から離れ、なるべく騒音がマシそうな柱の陰へ行ってスマートフォンを耳に当てる。

「もしもし」

『あ、もしもし、お兄ちゃん？』

「史織(しおり)」

聞こえた妹の声にため息をつく。

『ねえねえ、今日の晩御飯は何にする？　早く帰って来るんだよね、遅くならないんでしょ？』

「お前は俺の奥さんか」

『へ……っ？　もう兄妹(きょうだい)だから心配してるの、変なこと言わないでっ』

白い肌を赤くして、ワタワタと否定する史織の顔が目に浮かぶ。

両親が亡くなってからというもの、史織は以前にも増して兄である隼人を慕うようになった。元々ブラザーコンプレックスの気はあったが、今はもっと酷い。隙あらば日に何度も電話をかけてくるし、街を歩けば腕を絡め、テレビを見る時も傍を離れそうとしない。

両親をあんな形で突然失った恐怖と不安から、史織はまだ抜け出せてはいないのだろう。三年経った今も。

だから兄妹とはいえ必要以上にベタベタするのは良くないと思いつつ、自分が冷たくあしらうことで傷口を広げてしまうことを恐れて好きにさせていた。

『お兄ちゃん？』

「ああ、悪い。たぶん今日もいつも通りに――」

「どうせ俺なんて……生きてたってしかたないんだ……俺なんて……」

どこかからか、そんなつぶやきが風に乗って聞こえてきた。

顔色の悪いサラリーマン風の男が、フラフラとホームへ歩いていく。すぐそばの電光掲示板には、電車の接近を知らせていた。

「史織、ちょっと後でかけ直す」

『え？　お兄ちゃ――』

「うっふふふ、そうだ。貴様など生きている価値は無い。死ね、死ぬのだ。そしてそのゴミのような命を私に捧げるがいい！　クソ人間が！」

男の背後には、大きな鎌を持った黒装束の少女が“浮いていた”。ピンクがかったセミロングのやわらかそうな髪を持つのは、誰もが振り返りそうな美人。

果実のように艶やかな唇に、妖艶な笑みを浮かべながら男を見下ろし、その耳元でブツブツ囁いていた。

「やめろ」

男が列車の迫りくるホームに身を乗り出そうとした瞬間、隼人は少女の細い腕を掴んだ。

「な――ッ！」

少女の囁きが止んだことで、男は我に返ったように目に生気を取り戻す。

「んん？　あれぇ、俺は一体何を……あわわわわ！　あっぶねぇなぁ！」

目の前を電車が通り過ぎる。

「お、お客様、危険ですからあまり前に出られないように！」

「え、あ、す……す、すいません」

駅員に注意され、男はペコペコと頭を下げた。

男の無事な様子に、少女はキッと眉を吊り上げた。

「貴様！　よくも邪魔を！」

隼人の手を強引に振り払った。しかしハタとあることに気付く。

「お前は私が見えるのか……？」

目の前にいるのは、どうみてもただの人間の高校生。しかし、奴は自分に触れることさえした。

少女は弾かれたように周囲を見渡した。あれだけ人ごみに溢れ、混雑していたはずが、自分たちの周りだけにぽっかりと空間が生まれている。

「結界だ」

少女の疑問を察したように、隼人がそう説明する。

彼が指で示した方に目をやると、青白い光を放つ十字架が突き刺さっていた。それが不可視の壁を作っているらしい。

人々は、まるでそこに壁があることを知っているかのようによけていく。だがその実、誰一人今現在目の前で起こっている異変に気づいてはいないらしかった。

「貴様ただのクソ人間ではないな。……何者だ」
少女は警戒を強めるように、綺麗な眉を顰める。
隼人は甲に銀の十字架が入った黒い手甲をはめた。

「祓魔師（エクソシスト）だ」
「何……？」
少女が身を引くより早く、隼人に胸倉を掴まれた。
「くっ……放せ！　放せぇえ！」
小柄な少女は空中でジタバタと足掻く。
「暴れるな」
隼人は少女の目の前にスマートフォンをかざす。少女の顔からデータベースに蓄積されていた情報が検索される。
「な、何だそれは……」
「ただの検索機だ、噛みつきゃしない。リオ・フリナー、種族死神、レベル……たったのAランクか。徳（アレテ）も大して稼げねぇな」
「『たったの』だと？　Aランクの実力を甘く見るな！」

隼人を突き飛ばして距離を取り、持っていた大鎌を大きく振る。
少女とは思えぬ俊敏さと重さを兼ね揃えた一閃が、寸分の狂いも隙もなく隼人の首を刈った。

少女は嗜虐性のある微笑みを浮かべる。

「ふん、どうだ！　これが私の……」
「”これが私の”？」
「――！？」

すぐ後ろで声がして反射的に振り返る。慌てて体を捻ると同時に鎌を振りおろした。
しかし、すでに隼人の姿はどこにもない。
彼は離れた場所で、感情を乱すことなく静かに佇んでいた。
「貴様……舐めおって！　こうなったら」
大鎌を仕舞い、少女は真っ黒な本を取り出して大きく開く。
「死神の力をとくと見るがいい！」
「無駄だ」
「えぇい、うるさい！　『死の囁き』！」
唱えた瞬間、髑髏（どくろ）の付いた本がどす黒く光り出す。
「『命ずる、主は今すぐ我に土下座しろ！　非礼を詫びてその首を差し出すのだ』！」
シーン
「……」
「……む」
だから言っただろうとジト目で立ち尽くす隼人に、少女は顔を朱色に染め、ますます焦りを見せ始めた。
「なぜだ！　なぜ効かん！　人間ごときが生意気な！　くそくそくそッ！」

やけになった少女が、やたらめったらに鎌を振り回す。しかしそのどれもがかすりもしない。

「このっ――！」

一閃を避けて宙へ後転した隼人の手から、スマートフォンが離れて空を舞う。

カメラが隼人の方を向き、少女は画面に現れた検索結果の情報に釘付けになった。

「吉良隼人、祓魔師（エクソシスト）。レベル……ＳＳＳ以上だと……？　ッ――！」

スマホの向こうから伸びるように現れた隼人の手に首を絞めつけられ、柱に押し付けられる。

隼人はもう一方の手でついでに掴んでいたスマホを、大儀そうにポケットにしまい込んだ。

「で？　これで終わりなのか、Ａランクの実力ってのは」

あれだけ動いておきながら、息一つ乱していない隼人に、少女は唇を噛みしめた。

（……ＳＳＳ以上だと？　絶対に勝てんっ！　だがこんなところで人間にやられてたまるか！）

首はさほど苦しくはないが、十字架（ロザリオ）のついた手甲に触れられていては思うように力が発揮できない。

……しかし相手は男。

できることはまだある。

少女は自分の胸元へ手をやると、豊満な谷間を見せつけるようにおもむろに肌蹴た。

うるうると瞳を潤ませ、頬を赤く上気させ、唇に指を当てながら隼人を上目づかいに見つめた。

「お願い、もうあんなことはしないから助けて……っ、何でも言うこと聞くから。ね～？」

少女は隼人の鎖骨を艶めかしくなぞる。

「何でも？」

コクリと従順そうに頷き、ぐいぐいと白い谷間を強調する。

隼人はニンマリと笑うと、

「だったら自分で消滅しろ」

魔除けの札を彼女の額に張り付けた。

「あつつつっつぁ！　何をする！」

暴れた拍子に手を放され、ドスンと地面に落された。少女は煙の吹き出る札を急いで引きはがし、息を噴き上げて額を冷やす。

眉を吊り上げ、涙目で隼人を見上げた。

「貴様！　女子（おなご）がこのように恥ずかしい恰好でお願いしているのだぞ！？　別に言うことあるだろう！」

「はあ？　そんな中途半端な恰好で何抜かしてやがる。全部脱いでから言えよ」

「な……なに！？」

早送りで見る紅葉のように、少女は見る見るうちに真っ赤になった。

「脱げよ、ほら。早く脱いでお願いしてみろ、死神」

床にへたり込む少女の背中を、容赦なくぐりぐりと踏みつける。

（この男……ドSか――っ！　でも何？　この内から湧き上がる感覚はっ……違う、踏みつけられて嬉しいなんて……死神のこの私がドMだなんてこと……あーもっと強く踏みつけてぇ～、じゃない！　しっかりせんか、私！）

死神少女はどうにか体を捻ると、

「な……ならば取引しよう！」

隼人は嘆息した。最早このやり取りに飽きはじめているらしい。

「今更何の取引をするって言うんだよ」

「殺してやる。貴様……殺したいほど恨んでる奴がおるだろう」

隼人の眉がピクリと動いた。

「そう……貴様の親を轢死（れきし）させた相手だ」

「やめろ」

「ああー見える。……そやつは酒を飲んで無謀な運転をしていたようだな。謝罪の一つないどころか、お前の顔を見るなり毒づいたのだな？　ふむふむ」

「やめろって言ってるだろ……」

「『お前の親どもが死にやがったせいで、俺がこんな目に遭ったんだ！』とな。悔しかったろう。無念だったろう？　違うか？　私なら思い切り苦しめてから殺……っ」

ドォン！　と地面に押し倒された死神少女の頭の横に、隼人の拳がめり込んで穴が空く。

「それ以上、無駄口を叩くな……」

怒りに狂い見開かれた隼人の瞳孔の奥に、一瞬、蠢く物が見えてゾッとした。

「貴様人間ではないのか……？　なぜそうも悪魔臭い」

隼人は残忍な笑みを見せた。いや、どこか自嘲的な笑みにも見える。

「死神のくせに敵である祓魔師のこともしらないのか。来世はせいぜい、よくお勉強することだな」

「待て……話はまだ」

瞬間、隼人は少女を横抱きにして飛びのいた。

「な、なんだ突然！」

先ほどまで少女がいたところには、深々と白銀の刃が突き刺さっていた。

第2話：両手に花

「あー、何で邪魔すんだよハヤト～」

白刃と共に降ってきたのは、派手な髪色の青年だった。不満げに口を尖らせ、オレンジ色のサングラスを上げる。隼人とは違う名門高校の制服に身を包んではいるが、どう見ても妙な出で立ちの少年だった。

「邪魔するも何も、お前が横取りしようとしたんだろうが、颯太（そうた）」

少女を横抱きにしたまま軽く睨む。死神少女は突然のことに戸惑いながら、頬を薄紅色に染めてしがみついていた。

十字架の付いた日本刀を肩に乗せ、氷室颯太（ひむろそうた）は立ち上がった。

「お前結構アレテ稼いでるんだからさぁ、ここは俺に譲っちゃいなYo！」

腰に差したもう一振りの刀に肘を乗せ、颯太は陽気に指で作った銃の先を向ける。

「……断る」

「ケチ」

「そういう問題か」

何やら言い争う二人に、少女は口角を上げた。

「好機！　私に隙を見せるとは愚かな」

隼人の腕から飛び出して高く舞い上がる。

「あ、逃げた」

だが――

（な……っ！）

すでに隼人は少女の背後にいた。死神少女の細い首を後ろから掴む。

「最後の選択だ。証をよこすか、消滅するか。どちらを選ぶ」

「何？」

『証』とは悪魔が悪魔の力を発揮するために必要な道具のことだった。少女は苦々しげに死神帳を握りしめる。

「これを渡せば、私は死神としての力を失う！　そんな取引に応じられるか！」

「なら……仕方ないな」

隼人の手に力が入る。

「あ！」

「何だ」

「……やっぱり、すいませんでした」

照れるように、モジモジと謝った。

隼人は豪快に死神帳を破り捨てた。同時に少女の持っていた大鎌も消える。

「くそ……なぜこのようなことに」

少女は歯噛みするが、もう取り返しはつかない。

「隼人〜、お前、まだそんなことやってんのか。確かに証を失くし

ゃあ、悪魔どもは二度と悪さはできねぇ。けど、消滅させなきゃ一アレテも稼げないんだぜ？」と颯太。
「お前には関係のないことだ」
死神装束まで消えてしまった裸の少女へ、隼人は自分の上着を無言で放り投げた。少女はそそくさとそれを羽織る。

「それより颯太、お前の学校はここから遠いんだろう。遅れるぞ」
「……あ、マジだ、やっべ。ヘリ呼ぼーっと。もしもしオレオレ。ヘリを一機……え？　いやいや、オレオレ詐欺じゃないから！　だからオレだって！」

「わ、私はどうすればいい！」

隼人の上着に包まりながら、少女は今度こそ顔を赤くして懇願するように隼人を見上げた。

「相談窓口はあっちだ」

隼人の示す指の先に、祭司の恰好をした者が佇んでいた。金髪に碧眼。もう少し髪が長ければ美少女だと思ったかもしれない。もう少し眉が凛々しければ、美青年だと思ったかもしれない。だがその者は、男とも女とも判別は付かなかった。

「君はまた面倒なものを拾ったんだね」

完璧なまでのアルカイックスマイルは、どこか神々しさを湛えていた。だが、やはり声を聞いても、性別は分からなかった。
「前世悪魔だった君は、現世に跋扈（ばっこ）する悪を消滅させて徳（アレテ）を稼がなきゃ、身の回りに負が押し寄せることになるんだよ。折角命を賭けて悪魔退治をする割に、メリットが全くないと思うんだけど」

「それは俺の勝手だろう、エル。天使のくせに、殺しを唆すのか」

エルは優しげに細めていた目を開く。サファイアブルーの瞳は、冷ややかに煌めいていた。

「勘違いしないで。我々が救うべきは人間のみ。優しく見守り、諭すのも人間に対してのみ。だけど悪魔には、どんな手段をとってでも厳正な処罰を与えなきゃいけないんだよ。殺すだなんてとんでもない、悪魔は消滅させてしかるべきだ。断片すらも消し去り、跡形もなくなるほど……ね」

「そんなに人間が大事なら、そこの『人間』も救ってやれ。証を失った以上、そいつはもう悪さをできねぇんだから」

「あのですね、隼人、証しを失ったからと言って全く人間と同等というわけには――」

「後は任せた」

落ちていたカバンを拾い上げ、颯爽と立ち去っていく隼人の背中に向かってため息をつく。

「私は一応大天使だというのに、相変わらずの無礼ぶりですね」

だがその表情に、嫌悪がにじんでいるわけではなさそうだった。

・・・・・†・・・・・

「で？　何でこうなる」

隼人が隣の席のエルを半ばにらみながら尋ねた。

「君が救ってくれって言うから」

隼人と同じ制服に身を包むエルは、分厚い外国語の本をパタンと閉じて、あの胡散臭い笑顔を見せた。

「だからってなんでここへ入れた」

「ご心配なく。彼女は元々この学園の生徒だった、という『刷り込み』をしておきました」

「クラスまで同じにする必要ないだろう」

「彼女も何かと困ることもあるでしょうし」

「ところでお前って男だったのか」

「これは飽くまで私の仮の姿。お望みなら明日から女子になりましょうか」

「……お前はいつも微妙に話をずらすな」

隼人は一番端の隅に座る”元”死神少女、リオをチラリと盗み見た。小柄で可愛らしい顔をしているが、生来誰かと仲良くしようという努力をしない主義なのか、眉宇をキッと吊り上げ、桜色の唇を真一文に結び、刺々しいオーラをギラギラ放出しながら何やら読んでいる。

エルが一体彼女を、『どういう立ち位置の女子生徒』として刷り込んだのか分からないが、彼女のそばを通るとき、クラスの皆はまるで眠るライオンの傍を横切るかのように、心なしかおどおどしていた。当然、話しかけてくる友達もいないらしい。

「刷り込みか何か知らねえが、あいつ……どう見たって浮きすぎだろう」

視線に気づいたリオを視線がかち合う。だがリオはすぐにフン、

と顎(あご)をそらした。
彼女の手にあるのは、人間界適応マニュアル高校生編とやららしい。一応ここになじむ努力はするらしいと、隼人は解釈した。
「史織も待ってるし、そろそろ帰るか」
隼人がカバンを持って立ち上がった瞬間、
「はーやーとっ！」
短いスカートを翻し、他校の連中にも名前が知られるほど美人と言われる、隣のクラスの幼馴染の藤堂唯花(とうどうゆいか)が入ってくる。
長い黒髪は天使の輪が毛先まで広がり、ぱっちりとした二重の双眸は、見つめた瞬間どんな男も魅了する。
キラキラとした笑顔の唯花は、申し訳ないが、その後ろにつき従っている大人しそうなメガネの少女が霞んで見えるほどに可愛かった。
だからよく人からは『あんな子と幼馴染で羨ましい！　俺だったら……』と熱弁を振るわれることがあるが、隼人としては、学園を二歩歩けば『紹介しろ、紹介しろ』と男たちに付きまとわれるのが面倒で仕方なかった。
口をきいたことさえない男にすら、まるで友人のように馴れ馴れしく、そんな要望をされるのだからたまったものではない。
早く恋人の一人でも作ってくれれば収まるのにと、唯花が告白や遊びの誘いを断ったと聞くたびにぼんやりと思っていた。

「隼人、今日も第三理科室に集合ね！」
「断る」

この学園に一人しかいない、藤堂唯花の誘いを断る男、隼人はそそくさと教室を出ようとする。

「な、何でよ！」
「面倒だからだ」
「ダ、ダメ！　あんただって立派なＤＲＣ、Ｄｅｖｉｌ　Ｒｅｓｅａｒｃｈ　Ｃｌｕｂ、悪魔研究部の一員なんだから！」

藤堂唯花に好意を寄せる男子生徒たちですら避ける、非公認オカルトクラブの名を大声で叫んだ。
やれ音楽室に悪霊がいるだの、〇〇君の病気は悪魔の憑依によるものだ、だの吹聴して回り、自分のクラスを魔法陣と十字架だらけにした上、訳のわからない祈りの言霊とやらで授業を潰そうとして親が呼び出しを食らうこともあった。

愛らしい顔のおかげで、何とか『ちょっと変わった子』扱いで済んでいるが、でなければ精神科病棟送りになってもおかしくはない。

悪魔に憑りつかれてるのはお前の脳みそだろう、と誰もが心の内に思っていたが、当人に自覚はなかった。

隼人が実は祓魔師だと知ったら奇行も少しは落ち着くかもしれないが、そんなことが言えるはずもなく困ったものだと思っていた。

「はいはい。中二病を高校に持ち込むな」
「ち、違うわよ！　エル君は来てくれるよね？」
「ウィ。もちろん」

「お前も何でフランス人留学生設定なんだよ」
「高二病です」
「……あ、そう」

「あれ、そういえば隼人、あんたどうして今日はカーディガンだけなの？」
「別に」
「別にって……。あ、分かった。コーヒーかケチャップでも零したんでしょ！　全く、相変わらずお子様ね」

その端っこに座っている死神少女に貸したままだったが、おそらくどこかに捨てられているだろう。また購買部で注文しなければなと考えていた。

「隼人。忘れ物だ」

振り返ると、丁寧に折りたたまれた上着が自分に差し出されていた。

「お前……」

リオはどこか気まずそうに、隼人の目と床を交互に見やる。
隼人はリオに話しかけられたことと、わざわざ上着を返しに近づいて来たこと、自分の名前を呼んだことで、三重に驚いた。

「忘れ物……？」

唯花は隼人と彼女を見比べ、顔を顰(しか)める。それにリオはなぜか、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「ああ。今朝、素っ裸の私に隼人が掛けてくれたままになっていたからなぁ」
「な……っ！　す、素っ裸？！」

どんな場面を想像したのか、唯花は顔を真っ赤にする。

「嘘！　隼人に限ってそんなわけない！」
「まことだ。なあ隼人？」
「ノーコメント」

腕を組んでわずかに顎をあげるリオは、まるで哀れな平民を見下す女王のような高飛車な煌めきを双眸に湛えていた。

「あ、あんたたち、どういう関係なの？」
「フン。ここではっきりきっぱり言えと？　貴様もいい年なら己で考えろと言いたいが、私は親切だから教えてやろう。もちろん、がっちりしっぽりエロスな男女の仲に――」
「そんなわけ……ッ。ね！　隼人、違うんでしょ？」

唯花は隼人の腕を掴んで体を揺さぶる。

「……なあ。どう言えば一番面倒じゃなくなるんだ、大天使」
「君は相変わらず色恋沙汰には弱いですね、隼人。見ててください」

エルはにっこりと笑うと、隼人の腰に手を回して頬を肩に乗せた。

「安心してください、藤堂さん。隼人は私のものですから」

「ぶぅっ――！」

「か、香純？」

唯花の後ろで大人しく控えていたはずのメガネ少女が、エルの一言に鼻血を出して倒れる。

「な、何だ、こいつは！　笑顔で血など吹き出して、気持ちの悪い」

リオは本気で気味悪そうに頬を引きつらせた。

「エル……」

「うーん、やっぱり面白い」

「天使が人間で遊ぶな」

エルの頭を軽く叩く。

「で……でで、あなたのお名前は？　隼人のクラスメートさんみたいですけど？」

唇を震わせながらも、唯花は敵対心丸出しに尋ねる。

「黒神リオ。この世界の人間どもが、青春と言う名の甘酸っぱいひと時と苦い初恋を楽しむという部活とやらを探してたんだ。私もそれに入らせろ」

「エル、誰だあのマニュアルにそんなこと書いたのは」

「今度注意しておきます」

エルも心当たりがあるらしく、小さく嘆息していた。

「えー、でもー」

「そんな不気味な部に入りたいって言ってんだから、入れてやれよ。やったな、初めての自主入部者だ」
「隼人がそう言うんなら……」
しぶしぶ唯花が承諾し、妙な部に妙なメンバーが増えることになった。

第3話：悪魔研究部と召喚魔術

校舎二階の第三理科室は真っ黒なカーテンが引かれ、アルコールランプとガスバーナの明かりだけが煌々と周囲を照らしていた。
洗濯バサミで取り付けられた魔方陣やら魔除け的な何かがいかにもチープだが、その場に集う隼人ら五人は至って真剣だった。

いや、本当に真剣なのは部長である唯花と興味津々である新人のリオぐらいで、エルは人間界での暇つぶしに利用しているだけのようであるし、唯花の友達の西園寺香純は隼人とエルでする妄想ネタが目的。

隼人に至っては、表情の筋肉を動かすことすら面倒に感じているだけだった。

「いい？　この悪魔研究部は、そんじょそこらのオカルトクラブじゃないの。れっきとした証拠を重ね、真実に基づいて悪魔の存在を証明するための超論理的な部よ」

いかにもおどろおどろしく言う。
元悪魔ならお前の隣にいるけどな、とは隼人もエルも言わない。

「ほう、悪魔の存在を証明する……か。中々面白そうではないか。なあ隼人」

（俺に振るな）

リオのしたり顔に、隼人はそう思った。
自分は祓魔師で彼女は元死神。おまけに現役天使までもが『悪魔

の証明をする』などと謳う部に所属とは、事実を知る者には滑稽なことこの上ない。

隼人はため息をついた。

「唯花、そんなもん証明してどうする気だ。高校生なら高校生らしく、明るく健全な部に入ったらどうなんだ？」

「何言ってるのよ、これだって十分明るく健全じゃない」

どこがだよ、と言う前に、唯花は分厚い書物を持って立ち上がる。

「今日こそは悪魔を呼び出すわ！」

言うが早いか、教室からくすねてきたチョークで、本を見ながら床に魔法陣らしきものを描きはじめた。

もはやどこが論理的で、どこがどう他のオカルトクラブと違うのか分からない。

しかも魔法陣の円は歪んでいるし、細かい部分は端折られ、さらにスカートが短いくせに四つん這いになっているせいで、淡いピンク色の下着がチラチラ見え隠れしている。

「おい、本気でこんなもので悪魔が呼べると思っているのか、あの女」

リオは『笑いを必死に堪えています』と言いたげな表情で、その一部始終を見ていた。本物の悪魔だった彼女からすれば、さぞかし片腹痛い光景であろう。

「ああ、可愛いだろ」
抑揚のないその一言にも、リオは急に顔を赤くして悔しげに眉宇を顰めた。
「き、貴様！　まさかあんな女がタイプなのか」
「は？」
「全く……バカ男の典型だな、ちょっと抜けたような女に騙されては、後々苦労するのが分からんのか！　ああいうのは、男に可愛いと見られることを想定して作っているに決まってるだろう！　そんなこともわからないのか、貴様は！」
「何をそんな必死になってるんだ？」
「べ、別に必死になど……」
恥ずかしげに俯く。
「できた！」と唯花は立ち上がると、傍にあった椅子を引きずって魔方陣の上に置いた。
「隼人！　ここに座って」
「お前は幼馴染を生贄にするのか」
「い、いいから早く！」
「一体どんな召喚するつもりなんだよ」と本を取り上げる。
「あん……ダメっ」
色っぽい声が耳を掠めたが、隼人は構うことなくページを捲る。届かないよう上にやってしまえば、身長のある隼人相手に、唯花はなすすべがなくなる。
「召喚魔術。生贄を魔方陣の中央に座らせ、身動きができないよう

固定する。心に邪気を集めながら召喚魔術を唱えた後、生贄の唇へ召喚師の邪気を吹き込む。”唇へ”って……」
「キスですね」とエル。
「何よ、二人とも！　し、仕方ないじゃない、そう書いてあるんだから」

頬には朱が差し、俯き加減に隼人を見上げる。

「お、幼馴染なんだし、小さい時は一緒にお風呂にも入ってたぐらいなんだから、別にキスぐらい気にしないでしょ……？　ほら、早く準備して！　黒神さん、隼人の手を縛って」

隼人を強引に座らせ、リオに紐を放り投げる。それを受け取ったリオは、ニヤリと片頬を上げた。
ゆっくりと仰々しく隼人の後ろに回り、隼人の手首に縄を回しながら耳元に唇を寄せる。

「私の死神の証を奪った貴様を、こうして縛るというのは、ある種の興奮を覚えずにはいられんなぁ……隼人。もしここに二人きりなら、どうしてやろうか」

ふぅ、と勝ち誇ったように首筋に息を吹きかける。
だが隼人はそれよりも、背中にあたる柔らかな二つのモノの方が気になっていた。本人は隼人に攻撃的な言葉をかけるのに一杯一杯らしく、どうやら自ら胸を押し付けていることに気づいていないらしい。

それでニヤニヤと優位に立っているつもりなのだから、彼女も唯花のことをバカにできる立場でないのは確かだ。

（こいつ本当に元Ａランクの死神か？）

Ａランクともなれば、魔力だけでなく知力も相当あるはずなのだが、と検索機の故障を疑いたくなった。

「なあ、隼人？　たとえば貴様を裸にして思いっ切り辱（はずかし）めたら、貴様は――」

「リオ」

途中で言葉を遮られたリオは、不満げに顔を上げる。

「何だ」

隼人はじっとリオのライラック色の瞳を見つめた。隼人に凝視され、リオの胸はトクンと高鳴る。

「この……変態女」

ズドンッとリオの体を電流のような痺れが突き抜けた。

グッと胸元を押さえる。

（そっ、その辛辣な言葉……！　ああ、クソ！　なぜこうもドキドキしてしまうのだあぁっ。もういい隼人！　いっそのこと、この私を再起不能になるまでいじめ倒してくれぇっ――！）

「ゴーゴー鼻息が酷いわよ、黒神さん」

「う、うるさい！」

薄暗い部屋でもわかるほど、我に返ったリオの顔はリンゴのように真っ赤になっていた。

「よ、よし。いくわよ」
唯花は縛られた隼人を見つめ、ゴクリと唾を飲む。
「待て」
「何よ、黒神さん。邪魔しないで」
「私はこう見えて黒魔術には長けている。私にやらせろ」
自信満々に言い放つと、唯花の手の書物を取り上げた。
「新入りは引っ込んでて！　私がお手本を見せてあげる」
本を取り戻そうと伸ばした手を、リオはヒョイと避ける。
「だが貴様、今までそうやって悪魔を召喚できたのか？　ん？」
「うっ」
「まさか貴様、隼人と接吻がしたいだけではあるまい」
「な、何を言って――」
「ああ、もちろんわかっている。貴様は悪魔の存在を証明したいのだろう？　なら今回は私にやらせてみてはどうなんだ」
「そ、そんなこと言って、本当はあんたが隼人とキスしたいだけなんでしょ」
見事なブーメランに、リオは再び赤くなっていく。
「そ、そんなわけがないだろう？　私は既に隼人とがっちりしっぽりの仲なのだぞ？　今更、接吻ぐらい……」
「どうだか。夢でも見てたんじゃない？　もしくはただのいやらしい妄想」

「何だと？　貴様私を舐めているのか！？」

先ほどの上着のやり取りがまだ尾を引いているらしい。バチバチと飛ぶ火花が見える。

「隼人は私の裸をしっかりと見たのだ！　嘘だと思うなら聞いてみればいい、なあ隼人？」

「あんたが露出狂なだけでしょ？　逮捕されなくてよかったわね、黒神さん。ねえ隼人？」

「貴様……っ！」

「近づかないでよ！　この胸のデカい脂肪の塊が目の前をブラブラして邪魔なのよ！」

「何だと……あ、やめ……ちょ……っ」

唯花は、ぐりぐりとリオの豊満な胸を掴んで揉みあげる。

「どうしたの？　どうして欲しいのか、言いなさいっ、ほらほらほらほら！」

「や……めぁ」

「おい、どうにかしろよ、この状況。縛られた男の目の間で何やってるんだコイツら」

三人のことなどお構いなしに、録画用のカメラの準備にいそしむエルと香純に助けを乞う。

香純は分厚いメガネをキラリと光らせた。

「じゃ、じゃあ、ここはエル君がしたらどうかなぁ！　絶対！　ぜぇったい、悪魔さんも喜ぶよ！」

「喜んでるのはお前だけだ」

「私は構いませんよ、ハ・ヤ・ト」
「死ねよクソ天使」

あてにならない。全くもってあてにならない。
どんなメンバーの寄せ集めだよと嘆息しつつ、自分でなんとかすることにした。

「やめろ、お前ら。揉めるんなら、別のにすればいいだろう」
「いや！」

争っていたはずの二人の声が、きれいに重なり合う。

「いや、別に変な意味ではない。これは良くきく召喚魔術だからな」
「そ、そうよ。これじゃないとダメなの……うん」

声を揃えて拒否する二人に、仲がいいのか悪いのか分からないと思った。

「ちっ」
じゃんけんに負けたリオが忌々しげに舌打ちする。

「い、行くよ、隼人」

唯花が深呼吸して、何かをつぶやき始める。
エル曰く、唯花の集めている本の言葉は、どうやら古代欧州のものらしいのだが、訳せばかなり妙な意味になるらしい。
知らないとはいえ、真剣な顔で奇天烈なことをつぶやく唯花が相

当面白いらしく、呪文を唱えるたびエルの肩がブルブル震える。
そんな大天使様（）の様子に、奴は実は悪魔側のスパイではないかと思うことが多々あった。
「――！」
唯花の呪文が終わった瞬間、隼人は妙な気配に気づいた。
エルもリオも同時に息を呑む。
「つ、次は邪気を生贄の唇から……」
恥ずかしそうに決意を固め、赤面しながら近づいてくる唯花など眼中になく、隼人は気配の主を探る。
（そこか――）
双眸を鋭く細める。
ランプやガスバーナの明かりが消えて真っ暗になった。
「え……何？」
唯花が驚きに立ち止まった瞬間、エルは青い十字架を床へ投げて結界を張る。
「隼人……！」
「分かってる」
――ギャアアアアアアアア

鋭い牙をむき出しに、大きな犬が高々と飛び上がって襲いかかってくる。

「地獄犬（ヘルハウンド）……」

すでに縄をほどいていた隼人が素早く悪魔祓い用の手甲をはめると、大口を開けて飛び掛かってくる地獄犬をつかみ、床に叩き付けて消滅させた。

フッと明かりが元に戻る。

「びっくりした……」

唯花が視線を戻したときには、隼人は元通り手首を縛られたまま椅子に座っていた。

香純がメガネを上下させながら、周囲を見渡す。

「ねえ明かりが消える前、一瞬何か見えなかったかなぁ？」

「隙間風が入ってきていたみたいですね。アルコールランプの火が揺れただけですよ」

いつの間に開けたのか、エルが僅かに開いていた窓を閉める。

「そっか、じゃあ召喚魔術の続きを……」

「今日はこれで終わりだ」と隼人が立ち上がる。

「え？」

「これ以上遅くなったら史織が心配する」

「そ、そっか。それなら仕方ないね」

笑顔を取り繕う唯花に、リオは目ざとく気づいた。

「貴様、何残念そうな顔している。そんなに隼人と接吻したかったのか？　いやらしい女だ」
「そ、そんなわけないでしょうが！」
「どうだかな」
「新入りのくせに生意気なのよッ！！」
「何だ……や、やめっ」

再びリオの胸をつかんで揉み回す。

「や、やめんか……っ、おい」

隼人は、きっと二人は似た者同士、いつしか親友になれるに違いない。と勝手に断定し、「じゃあな」とその場を後にした。

斜陽の光に照らされた靴箱は、ぼんやりと赤く染まっていた。

「エル、さっきのは……」

靴をはきかえながら、先ほどの光景を思い出す。

「ええ、本物の地獄犬でした」
「どうなってる……唯花のショボイ召喚術で呼び寄せられたっていうのか？」
「いいえ、たまたま魔界から紛れ込んできた、漂魔（ひょうま）でしょう」
「それはそうだろうが、ピンポイントでここに来るか、普通」
「あれは鼻が利く。大方、貴様の“臭い”に吸い寄せられたのでは

ないか？」

いつの間に唯花から解放されていたのか、靴箱にもたれかかり、腕を組んでリオが言う。

「並外れた嗅覚をもたない私ですら、お前から僅かに邪な香りを感じる。なあ隼人……貴様は本当に人間なのか」

「……じゃなきゃ……一体何に見えるんだ」

肩越しに彼女を振り返った隼人の顔には、堪えきれない怒りが滲んでいた。

両親の仇を殺してやると言って隼人の怒りを買った時と同じ。背筋がうすら寒くなり、自分の腕を思わず強く握る。

何も言えず口をつぐむリオから視線を外し、隼人は無言で立ち去った。

「祓魔師は普通の人間ではありません。彼らは皆、前世悪魔でした。悪魔として悪行の限りを尽くし、聖なる力によって葬られた者たちです。そんな前世の業（カルマ）を負ってこの世に転生した彼らは、悪魔と対峙し、滅ぼすことでのみ罪を贖（あがな）い、平穏な生活を手にすることができるのです」

「ほう、それは随分親近感の沸く話だ。あいつは前世、何の悪魔だったんだ。死神なら、気が合いそうだ」

エルはいったん間を置き、遠ざかっていく隼人の背中を哀愁漂う瞳で見つめた。

「彼の前世は、ルシファー。魔王（サタン）です」

エルがそう言った途端、その名前に反応するかのように、隼人の影が不気味に歪んだ。

第４話：とある仮説

どこまでも広がる暗黒の闇。

己の身の回りは、常に鉄の匂いがまとわりついていた。

どんな相手も自分にひれ伏し、思いのままに操れる。

数千数万殺したいだけ殺し、老若男女犯したいだけ犯し、欲して尚、手に入らないモノなど無い。

誰もが己の黒き翼の音に怯え、己の赤き瞳を崇拝し、己に魂すらも捧げたがる。

己を止めるものなどない、闇世界の覇者――

己は王だった。

何と言う心地よさだ。恍惚となって、己の唇に赤く長い舌を這わせる。

だが突如、目の前を白い光が包んだ。

体を焼き尽くされるような痛みと、初めて感じる恐怖が脳天を突き抜ける。

『――――！』

声にならない己の断末魔が、赤き煉獄の地の果てにまで轟いた。

「お兄ちゃん！　朝だよ朝朝朝！」

薄っすら目を開け、隼人は息苦しさの原因を知った。

「史織……重い……」

「お、重くなんてないもん！」

隼人の妹、史織は恥ずかしそうに隼人の腹の上からどいた。短い制服のスカートで、兄とはいえ男の腹の上にまたがるとは……と隼人は未だ冴えないで起き上がった。

「お兄ちゃん、汗びっしょり！　や、やっぱり重かった？　ごめんね」

また”あの”夢を見ていた。あの前世の夢を。

しかし、今日はいつもと違った。最後、白い光に包まれた瞬間、言い知れぬ怒りと“何か”への強い憎悪を感じた。

あれは一体何だったのか――

「顔色悪いよ、大丈夫？」

捨てられた子犬のように、ウルウルと大きな瞳に涙を溜め、顔を覗き込んでくる。カットしたばかりのボブヘアに、何年も前の誕生日に買ってやった花のピン止めを、未だ大事そうにつけてくれてい

た。

史織は真面目で学校の成績もよく、料理も得意で家事好き。だが、しっかりしているかと思いきや、実のところ泣き虫で、母親譲りで大の心配性だった。

そんな妹に自分が妙な夢に悩まされていることや、それが前世の記憶の一部だなどと言えるはずはない。

どうにか笑顔を取り繕いながら、小動物のように不安げな史織の頭を「大丈夫だ」と撫でてやった。

だがその瞬間、血の味がぶり返して、部屋を飛び出る。

半ばなだれ込むかのように洗面台へ行き、胃の中のものを吐き戻した。

「グ……ごっほごほごほ……ッ！」

水で洗いながら浅い息を繰り返し、鏡に映った顔を見つめる。夢は、今までで一番リアルで鮮明だった。

「これも……前世からの業（カルマ）なのか」

一瞬、鏡の中の自分が小さく笑った気がした。

「お、お兄ちゃん……！」

すぐに史織が追いつき、隼人の背中を懸命になでた。

「ご、ごめんね、気分悪かったんだ……。病院行かなきゃ」

そばを離れようとする史織の手を掴んだ。

「いや、一時的なものだ。吐いて楽になった」

「でも、史織がお腹の上になんて乗らなきゃ……っ」

自分のせいだと思っているらしい史織は、おどおどとして混乱している。何か言い訳になることはないかと、思考を巡らせた。

「あー……実は昨日、酒飲んだから、たぶんそのせいだ」

史織は一瞬、長いまつげをパチクリとさせる。だがすぐに、最近きれいに整えだした眉毛を吊り上げた。

「お酒って……お兄ちゃん未成年でしょ！」

「ちょっとノリで」

「もう、次は絶対だめだからね！　だめだめだめ！　はい、約束っ！」

胸を軽くポカポカと叩かれた後、無理やり指切りをさせられ、隼人は苦笑いした。だが、こういう日常の何気ないやり取りに、ひどく癒される。

「でも朝ごはんどうする？　おかゆとか作ろうか？」

テーブルの上には、すでに湯気の立つ味噌汁や卵焼きなど、おいしそうな朝ご飯が並んでいた。隼人は冷蔵庫を開けながら、

「今朝はこれだけでいい。あとは晩飯に食うから残しといてくれ」

血の味を忘れようとするかのように、一気に野菜ジュースを飲み干した。

家を出てすぐの曲がり角に、柔らかそうなピンク色のセミロングをなびかせる少女がいた。彼女は思わず見惚れて立ち止まる男らを鋭く睨みつけ、無言で威圧している。

リオだ。

隼人の姿に気づくと、一瞬頬を染め、気まずそうに咳払いした。

「よう、隼人」

「こういうとき人間界では『おはよう』って言うんだよ、元死神」

「分かっている。マニュアルで読んだ。『おはよう』『こんにちは』『今晩は家に親がいないの』だろ」

「……最後のは違う」

おそらくあのマニュアルには、人間の監修がついていないのだろう。時々おかしな文面があるらしい。

リオは視線をそらすと、足元を見ながら肩にかけたカバンをかけなおした。

「隼人……昨日のことだが……。わ、私は別に貴様を人間でないなどとは――」

「そういえば今日の一時間目って、古典だったか？」

リオは顔を上げ、苦しげに寄せられていた眉をゆっくりと戻す。

「い……いや、確か英語などという科目だったが」
「そうか、サンキュ」
ニッと笑う隼人の優しそうな笑顔に、リオは紅潮して瞳を潤ませた。
「ほら、行くぞリオ」
「は、隼人、待て。だから、まだ話は終わっていない……っ」
先を歩く隼人の前に回り込んだ。
「糞天使から聞いた。お前は悪魔を消滅させて徳を得なければ、前世の業によって不幸に巻き込まれるのだろう？　ならば、なぜ私を助けた」
「ノーコメント」
「私に恩を売って利用しようと言うのか？　それとも何か別の……」
「あ、ヤバい。もうすぐ電車がー」
「ち、ちゃんと答えろ……っ！」
その時、どこからともなくババババという音が聞こえてきたかと思うと、強い風が上空から吹き付けた。
『吉良隼人！　吉良隼人！　発見発見～ッ！』
朝っぱらから他人様の名前を大音量で叫ぶ迷惑なヘリから、ツーッと紐が垂れてきたかと思うと、誰かが滑るように降りてきた。
「うっす！」とその人物が片手をあげる。

派手な髪色に、イヤホンとサングラス、それに腰の二振りの日本刀。
祓魔師（エクソシスト）仲間の颯太（そうた）だった。

「お前はどこぞのレスキュー隊だよ」
「お前の心をレスキュー☆」
「お前の頭をレスキューしてろ」

颯太は一本取られたとカラカラ笑うと、隼人の隣で腕を組む、生意気そうな顔の少女、リオに近づいた。
制服姿の彼女を、上から下までジロジロと無遠慮に見回す。

「お前、あんときの死神だよな？　へぇ、そうしてると人間っぽいじゃん」
「放っておけ」
「愛想ねぇ～」

ヘリが立ち去ると、すぐに黒いリムジンが甲高いタイヤ音を立てて止まる。
颯太は自動で開いた扉に真っ先に乗り込むと、「お前らも早く」と車内に引きこんだ。

車内は予想通り、待合室のようにとてつもなく広い。

「おい隼人、顔色悪いぜ？　さては朝飯食ってねぇな！　氷室家特製サンドウィッチ食えよ」

座席の間のテーブルごしに、高級肉をぜいたくに挟み込んだ、肉汁滴るカロリーの高そうなサンドウィッチを差し出してくる。

いつもなら朝っぱらからだろうと、ありがたく頂戴しただろうが、今は気分が優れない。

「サラダだけでいい」

目の前のレタスをつまんだ。

颯太は差し出していたサンドウィッチを自らの口に放り込むと、トロピカルフルーツジュースでうまそうに流し込んだ。

「貴様はどこかの国王なのか」

「むん？」

リオの問いかけに、颯太はストローを咥えたまま、顔に不思議そうな色を浮かべる。

「ある種そうだろうな。颯太は世界有数の財閥の御曹司だ」と隼人。

「ほう、チンピラとかいう種族にしか見えんが、実は大金持ちというわけか。このような生活ができるとは、隼人と違って、前世のカルマとやらがないのか？」

「優しい悪魔だったんだろ」

隼人の冗談が通じなかったのか、リオは真剣な顔で首を捻っていた。

颯太はトンッとコップを置く。

「何好き勝手言っちゃってんだよ。こう見えてガキんちょの頃から黒服の怖ぇおっさんらに襲撃されたり、要人狙った流れ弾が腹掠めたり、性質の悪いパパラッチに追い回されたり、すんげぇ修羅場くぐってんだぜ？　見た目と違って、お坊ちゃん業ってもの大変なの」

颯太が両耳からいつもしているイヤホンを抜き取ると、左右それぞれから別々の言語のニュースが聞こえてきた。車内にも様々な国の経済誌や新聞が置いてある。
大変というのは、あながち誇張でもないらしい。

颯太はイヤホンを耳に戻すと、オレンジ色のサングラスの向こうから、珍しく真剣な眼差しを向けてきた。

「それより昨日、エルから漂魔が現れたって聞いたぜ？」

わずかに空気が変わる。颯太はドカリと背もたれに体重を預けた。

「俺も最近になって結構見るんだよなぁ。ザコばっかりとはいえ、あんまり数か増えると対処しきれなくなる」
「たまたまだろう」とリオ。
「いや、何でこんなに数が増えたのかって考えたときに、俺思ったんだ」

颯太は身を乗り出し、テーブルの上で両手を組んだ。

「“壁”のどっかに穴が空いてんのかもしんねぇって」

しばしの沈黙が訪れる。

「壁に……穴、だと？　まさか”狭間の壁”のことを言っているのか？」

颯太の仮説をリオは鼻で笑った。

「莫迦も休み休み言え。人間界と魔界の間にある”狭間の壁”はその昔、神が作ったものだ。作り出した神ですら容易破壊できぬほどに強固な壁のおかげで、人間どもは魔界の脅威から逃れることができている。そんなものに穴を空けるには、人間界と魔界の両方から掘り進める必要があるのだぞ？　当然、相当膨大な時間もかかったはずだ。それを完成まで気付かなかいほど、天界が無能だというのか？」

「ま、そりゃそうだけど……」

颯太も思いつきで言っただけらしい。リオに反論できるほどの根拠は、全く持ち合わせていなかった。

『お坊ちゃま。到着いたしました』

スピーカーから運転主の声が聞こえた。

「隼人……」

降りようとする隼人の背に颯太が声をかける。

「記憶にはとどめておく」

隼人の一言で安心したかのように、颯太は笑顔を見せた。

「おうおう、そうしてくりゃれ」

またな、と遠ざかっていく颯太の車を見送った。

「朝っぱらから妙な男だ。なあ隼人」
「……ああ」
「隼人！」
校門を通り過ぎたあたりで、後ろから声がかかる。彼の姿を見て懸命に走ってきたらしい唯花が、白い肌を赤く染めて息切れしながら追いついた。
「あれ？　今日いつもの電車乗ってた？」
「いいや、乗っていないが？」
隼人の隣に悠然と佇みながら、隼人の代わりに答えたリオに、唯花は刺すような視線を送る。
「ちょっと……なんでアンタが一緒に」
「なんでだろうなぁ？」
隼人の腕に絡みつき、これ見よがしに柔らかな胸をぐいぐいと押し付ける。
「ちょっ……」
押し付けられている隼人よりも、見せつけられている唯花のほうが絶句して口をパクパクさせる。
隼人が「離れろ」と面倒くさそうリオ引きはがすと、唯花はキッと口を結んで隼人を指差した。
「今日も集合だから！　第三理科室っ！」

「いや、悪いけど、今日は……」

「今日は……何よっ」

強い口調とは裏腹に、唯花の目には薄っすらと涙が浮かんでいた。本人は必死に堪えているようだが、これで断ったら鬼になる気がした。

「……分かった、行く」とあきらめ気味に嘆息する。

本当は颯太の説を確かめてみたいのだが、と史織に遅くなる連絡を入れようかぼんやり考えていた。

先を行く隼人の後を嬉しそうに続こうとする唯花の前に、リオが立ちふさがった。

「泣き落としか。女の武器を使うとは、貴様のレベルも知れたものだ」

「あんたには言われたくないわよ、この胸の化け物！」

むんず、とリオの片胸を鷲づかみにする。

「やめろっ！　はなせぇっ、やっ……」

恥ずかしそうに狼狽しながら、慌てて唯花の手を払おうとリオが両手を上げた瞬間、唯花の双眸がギラリと光った。

「隙アリッ！」

バサッという音がつくほど豪快なスカートめくりに、意外とセク

シーなリオの黒い下着が丸見えになる。そばを歩いていた男子学生数人が鼻血を吹いて倒れた。

「やああっ！」

リオは真っ赤になって、あわててスカートを抑える。

「この……貴様っ！　仕返しだ！」

わなわなと口元を震わせてそう言い放つと、唯花のスカートの裾を勢いよくめくり上げる。

だが――

「け、毛糸のパンツだと……っ！」

現れたのは下着ではなく、可愛らしい毛糸の防寒具。期待して見守っていた男らの歓声が盛り下がる。

「おーほっほっほ！　私には一分の隙もないわ！」

毛糸のパンツを見せておきながらも、得意げに言い放つ。

リオはそれでも引き下がる様子を見せず、

「だったら」

「きゃ！」

リオは唯花を地面に押し倒して馬乗りになり、強引に制服を脱がしにかかる。それには唯花も焦りを見せた。

「やっ、何するのよ！　アンタは私に傅(かしず)く方でしょ……っ！　あっ

……」
「ふん、いつまでも私がやられると思ったら大間違いだ！」
唯花を見下ろし、嗜虐的に微笑む。
「さあ、今日こそは大人しく私に蹂躙（じゅうりん）されるがいい！　ほら！」
「いやあっ」
リオに胸元を肌蹴させられ、唯花は涙目になってじたばたと必死に抵抗する。
「ほらほらどうした！　ははははは！」
「こんな往来で何やってんだ、お前らは」
二人の戦いは、隼人に頭を叩（はた）かれて終了した。
・・・・・†・・・・・
「そうですか。颯太がそんなことを」
放課後の屋上を吹き抜ける冷たい風に、エルはそっと髪を耳にかけた。
隼人は金網に背中を預けて腕を組み、小さく嘆息する。
「俺も今日の放課後、調べてようかと思ったんだけど……」
「幼馴染の涙には敵いませんよねぇ」

「見てたのか」
「たまたまですよ」
微笑むエルにいぶかしげな視線を送りつける。
「なあ、一つ聞いて良いか？」
エルの下肢に目をやると、不快そうに眉を寄せる。
「……何でスカート穿いてんだよ」
やっとそこに突っ込んでくれたかとばかりに、エルは花開いたように白い歯をこぼす。
「そりゃ、隼人のご希望通り、今日から女子生徒になったからですよ。どうです」
くるりと回ってみせるが、そんな希望はした覚えがない。
だが、あごに手を添え、小首を傾げる姿は、どこからどうみても金髪碧眼美女。胸も相当あるらしい。
しかも薄く化粧をしているらしく、頬はチークで桃色に染まり、唇も艶やかに光を跳ね返していた。これに微笑まれて、心拍数を上げない男はいないだろう。
「可愛いでしょう？」
「キモい」
隼人には、どう見ても女装している男にしか思えない。極めて正

直な感想を述べた。

「相変わらずつれないです、グスン」

わざとらしく唇を尖らせ、右手を目の下にあてる。何をふざけているんだと言おうとしたとき、屋上の入り口に人の気配を感じて強いまなざしを向けた。

バンッと蹴破るように扉が開く。

「おいおいおい！　てめぇ、吉良！　エルちゃんを泣かせるとはどういうことだぁ！？　ああん？」

やたらと図体の大きいゴリラ顔の男が、巨体を悠然と揺らし、竹刀で肩をたたきながら現れた。いまどき下駄を履いている男の後ろには、ぞろぞろと子分らしき男らが、同じく隼人を睨みつけながら続く。

「……誰」

学年章からしてリーダー格のゴリラ男は、隼人より一つ上の三年生らしい。

見てくれこそヤクザに片足を突っ込んでいそうだが、巻いている鉢巻きや腕章が異様だった。

「私のファンだそうですよ」

「はあ？」

「お前は唯花ちゃんとリオちゃんとのことでも気に喰わなかったんだ。ベタベタベタしやがって！　今朝も嫌がるリオちゃんのおっぱいを、無理やり肘でこねくりまわしてやがっただろうッ！　こ

の変態野郎がぁ！」

無理やりどころかあれは逆セクハラだったんだが、と言いたいが、人間の言葉は通じまい。

部下たちも鼻息を荒くしながら、完全に戦闘モードに入っていた。

「テメェには、この学園のルールを教えてやるぜ！　俺たち――」

二人の子分が、『美少女不庵倶楽部』と書かれた横断幕をピンと張り、一人がその前で四つん這いになる。

「美少女不庵倶楽部のなぁ……」

横断幕の前で四つん這いの子分の背中に片足を乗せ、ニヒルな笑みを浮かべるゴリラ。

この上ないダサさに、さしもの隼人も言葉を失っていた。

「会員番号１０７８番！　行け！」

冴えないメガネ少年が、「はい、五里（いつさと）部長ッ！」と応援団のように勇ましく声を上げて進み出る。

「倶楽部三か条ぉ！　一ぉつ、学園の指定美少女に気軽に話しかけないことぉ！　ストーカーおよび持ち物の交換、盗撮盗聴厳禁、挨拶は心に敬礼あるのみッ！　二ぁつ、二人きりにならないことぉ！　告白の際は部長に同席を願うことぉ！　却下された場合は潔く諦めるべし！　三つ、プライベート時でも呼び捨てにしないことぉ！」

「三つ、いかなるときにも、敬意を込めた可愛い呼び方をすることだろうがぁ！」

少年の背中に、部長の豪快な飛び蹴りが入る。衝撃で抜けた少年のメガネのレンズがコロコロと転がり、隼人の足にぶつかって倒れた。

何が起こっているのか、正直よく分からない。

「あの……ファンクラブのルールが、いつの間にここの校則になったんスか？　ゴリ部長」

「ゴリじゃねぇ、五里（いつさと）だ！　問答無用！　吉良！　倶楽部三か条を、気絶するまで体に叩きこんでくれるわッ！！」

口角泡を飛ばしながら、宣戦布告をする。

「野郎ども！　行けええええええッ！」

「おるらあああぁぁぁッ！！！！！」

「……」

魚群が突っ込むかのように、隼人は男らの中に呑みこまれていった。

「で、気絶したのはあちらさん、と」

いつもの男子姿に戻ったエルが面白そうに言った。

「正当防衛だろ」

肩に手を当てながら腕を回す隼人の後ろでは、白目を剥く男らの山ができていた。

何人相手だろうと、体術に長けた隼人にかすり傷の一つでも負わせることは、彼らには不可能だった。

だがエルも男の姿に戻るのなら、わざわざ女の姿にならなくてもいいのにと思う。『刷り込み』の手間をかけてでも隼人をからかいたいと思ってやったなら、正真正銘真正のアホだ。

「隼人！　エル君！　こんなところにいた！　もう何してるの？　早く早く！」

屋上の入り口から、ファンクラブ指定美少女であるらしい唯花が二人に呼びかける。もうこんな時間だったか、と隼人はカバンを拾い上げた。

「今すぐ第三理科室に直行ね！　特ダネ掴んじゃったんだからっ」

スカートを翻し、意味深なことを口走りながら唇に指を当てる唯花は、ファンクラブの野郎どもが悶絶するであろうほどに可愛かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3458ba/

転生―エクソシスト―祓魔師

2012年1月15日02時46分発行